

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成28年10月10日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 今 田 弓 女

助成の種類	平成28年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第25回 国際昆虫学会大会 XXV International Congress of Entomology		
発表題目	Bryophyte-feeders in the midst of carnivores:long-term association between rhagionid flies (Diptera: Rhagionidae) and liverworts		
開催場所	Orange County Convention Center, Orlando, USA		
渡航期間	平成 28年 9月 23日 ~ 平成 28年 10月 4日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	渡航費	222,026円
		現地での交通費	6,800円
		宿泊費・日当	35,020円
		学会参加登録費	50,000円
	合計	313,846円	
	上記に助成金を充当		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 採用が決定してからすぐに助成金を振り込んでいただけたことで、飛行機のチケットや宿を早く押さえることができ、非常に助かりました。今回、学会会場から離れた場所の研究室訪問までも快く認めてくださったお蔭で、さらに充実した出張となりました。大学院生にとって海外で開催される国際学会への参加は精神的・金銭的にハードルが高いですが、数多くの外国人研究者との出会いは、将来的に研究を進めていく上で糧となると思います。今後もぜひこの助成事業を続けていただきたいと思います。		

## 成果の概要/今田弓女

### 大会の概要

国際昆虫学会は世界最大の昆虫関連の学会であり、100年近くの歴史を持つ。近年では4年に一度、オリンピック年に定期的開催されている。開催地は毎回異なり、今回はアメリカ昆虫学会が主催し、アメリカ合衆国フロリダ州オーランドでの開催であった。大会本部の報告によると、今年の大会参加者数は6000名程度にも上ったとのことである。

大会開催地であるオーランドは全米屈指の観光都市であり、私の宿泊したホテルから会場にかけても多くのテーマパークが立ち並び、朝から深夜まで多くの観光客が訪れていた。

### 自身の発表概要

私は、博士課程の研究成果の一部に関する内容について英語で口頭発表を行った。陸上植物を食べる昆虫は地球上の生物多様性のきわめて大きな部分を占めているが、その関係性が植物の進化においていつ頃、どのように成立したかについては未知な点が多い。そこで、私は最初に出現した陸上植物であるコケ植物を食べる昆虫に注目した。こうした昆虫の生態や進化を知るとは、植物と植物食の昆虫の相互作用の初期段階を知る上で大きな手がかりとなると考えられる。今回は、コケ植物を食べることに特化したアブの生活史や日本での多様性、そしてこのアブの食性の進化史とその変化に伴う幼虫の形態進化といった研究成果について発表を行った。

発表後、会場近くで出会ったスミソニアン博物館で働いているアブ類の研究者などからとても興味深かったと褒めていただき、その日の北米のハエ類研究者の集会に誘っていただいた。その集会の参加者は60名程度とアットホームな雰囲気であり、はじめに参加者全員が自己紹介を行い、世界各地の博物館のキュレーターから、博物館の収蔵標本に関する情報提供が行われた。参加者の研究対象とする分類群はさまざまだったが、自己紹介がてら各々の研究対象に対する思いなどについて語る方も多く、とても温かく楽しい雰囲気を共有できた。嬉しかったことに、集会の場には私の発表を聴いて下さった方が数名おられ、発表が非常に興味深く心に残ったといった好意的な感想をいただき、この学会で発表することができて本当に良かったと思った。

### 学会で印象的だった出来事・講演

今回の学会では国内学会ではなかなか聞くことができないような非常に興味深い講演がいくつもあった。とくに、近年オーストラリアで見つかった奇妙な形態をもつ原始的なガ類の新しい科に関する講演は前からとても楽しみにしていた。ところが、発表キャンセルの発生に伴うスケジュールの再調整によって、この発表は予定されていた時刻よりも早く行われ、聞き逃してしまった。同じセッションの会場で隣の席におられた発表者本人にそのことを伝えると、親切にも、会場内のカフェで発表に使われたスライドを見せていただきながら発表内容につい

てじっくりと伺うことができた。私は、これまでの研究内容と最近の興味について話すと、熱心に耳を傾けてくださり、今後の研究にできる限り協力したいと仰ってくださった。

印象に残った発表はたくさんあり、とくに昆虫の飛翔形態、ハエ類の進化に関するシンポジウムはこれまで他の学会で聞いたことがない新鮮な話題ばかりでとても勉強になった。個人的には、緻密な形態観察によって新たな問題を提起する研究や、現生生物の詳しい生態・形態に関する知識と古生物の形態に関する知識を総動員して大進化の歴史の解明に挑む研究などにとくに魅力を感じた。

#### スミソニアン博物館での研究室訪問

学会終了後には国内便にてワシントン D.C. に移動した。ワシントン D.C. は、オーランドに比べてより秋らしく、涼しく快適な気候であった。首都として計画的に設計されたという街だけあって、街並みは美しく整備されていた。スミソニアン博物館群の境界は、ポトマック川を南に、緑豊かな公園が広がるのどかな場所だった。

私は事前にアポをとっていたスミソニアン国立自然史博物館の2つの研究室を訪問した。まず、植物と昆虫の相互作用に関して古生態学的アプローチから先駆的な研究を行っているコンラド・ラバンデイラ氏に研究室を案内していただいた。この研究室にはさまざまな年代、地層から得られた昆虫と植物、そして未同定の化石などが大きな引き出しの中に溢れかえっており、研究室のメンバーにそれらを見せていただきながら説明していただいた。ラバンデイラ博士とは今後の研究内容とそれに必要な資料収集について相談し、またキャリアパスについてご助言をいただいた。

また、ガ類の研究者として世界的な権威であるドン・デービス氏とお会いした。デービス博士とは、近年の研究動向について情報交換することができた。今後の研究の方向性について話したところ、手法に関する助言とともに激励の言葉をいただいた。また、スミソニアン自然史博物館の収蔵庫に収められているガ類を一部見せていただいた。この博物館のコレクションは世界最大規模というだけのことはあり、ガ・チョウ類だけで一つの階全体を占めており、その莫大な資料数に圧倒された。

#### おわりに

4年前に韓国の大邱で行われた前回の国際昆虫学会には修士1年の時に参加したが、それが私にとって初の国際学会であり、また初の単独での海外渡航でもあった。当時はこの助成金制度の存在を知らなかったため、私費で参加した。前回のこの学会への参加は、非常に楽しく思い出に残るものであったと同時に、もっと英語を自在に話し、海外の研究者と意見交換できるようになりたいという目標をもつきっかけとなった。そして今回、本大会に参加して、多くの研究者と踏み込んだ研究の議論ができたことで、非常に大きな収穫が得られたと感じている。重ねて、本制度に採用していただけたことに心より感謝申し上げたい。